

庭園スタイルの模倣と創造

－苑池の空間デザインと古代日韓－

栗野 隆

- I. はじめに
- II. 日韓における造園・造景の基本的技法
- III. 模倣からの出発－百濟から飛鳥に持ち込まれた「方池」
- IV. 日本的スタイルの創造－「曲池」から「池泉」へ
- V. むすび

要旨 古代日本のランドスケープ・アーキテクトが、白紙を目の前にして「日本庭園」という姿を描いたとは思えない。作庭にかかわらず創作という行為は参照されるべき何物かと、ある相対的な「関係」を取りむすぶことによってしか成り立ちえないからである。それは形を真似る模倣の対象であったり、創造のための差異化の対象でもあったりするような、創作行為における「模範／反模範」という関係に置き換えられる。本稿では、飛鳥・奈良時代におけるわが国の苑池と韓国の苑池との空間デザインを比較検討し、「模倣」と「創造」という対立概念を基本視座としてわが国における古代苑池のスタイルの変容を論じた。飛鳥時代に登場した方池、飛鳥時代末期から奈良時代初頭にみられる方池から曲池への推移形、そして奈良時代の曲池という苑池スタイルに通底する空間デザインは、百濟の方池と新羅の曲池の模倣を基調とした点に特徴が看取でき、日韓における方池から曲池に至るまでの展開には、半世紀の時期差をともなった様式史的相同性が認められた。また、東院上層苑池は、雁鴨池の平面計画を「縮小」してトレースしたような点において、韓国苑池を模倣した極致ととらえられるが、それはいっぽうで日本庭園としての独自性を規定する「縮景」という創造的技法を結果的に見出したことでもあり、東院上層苑池の空間デザインは模倣と創造の両義性をはらんだものであると指摘した。

キーワード 古代苑池 方池 曲池 平城宮東院庭園 雁鴨池

I. はじめに

『作庭記』という日本庭園史学の立脚点 近代に始動した日本庭園史研究の創始は横井時冬による『園藝考』(1889)¹だが、これを皮切りとして小澤圭次郎、龍居松之助、外山英策、吉永義信、重森三玲、森蘊、久恒秀治などの庭園史家によって様式研究が展開され、現在の日本庭園史研究における様式史観の礎が築かれてきた。彼ら庭園史の先達が指摘してきたことは、世界各国の様式のなかでもわが国の伝統的庭園は、縮景、借景、写景に代表される景観の構造化技法、池庭、枯山水、露地などにみられる空間の構成技法、飛石、石組、延段、滝組など細部技法に、「日本庭園」というスタイルの特異性・独自性が認められるということであり、それは現在の日本庭園史研究においても、もはや疑われる余地のない通念として定着している。日本庭園が世界でも独自の様式として特異性を獲得したことを確たるものと指摘できるのは、立石、池泉、島、滝など日本庭園特有の設計言語を詳述した、日本庭園史学の立脚点とでもいべき平安時代におけるわが国最古の造庭書『作庭記(前栽秘抄)』²の存在があるからである。

これまでの日本庭園史学は、平安時代における貴族邸宅や寺院などの敷地空間に「様式化された日本庭園」が存在したことを文献的にも裏づける本書に、あまりにも大きく依拠してきたといってよい。その理由は、本書が平安時代以降連綿とつづく日本庭園の史的延長線上に確固たる方向づけをおこなっているからだが、逆に平安時代以前の庭園を具体的にどのようなかたちでこの『作庭記』に結びけるのかというのは、いまだ研究途上の問題となっているのも、歴然とした事実としてわたしたちは自覚しはじめている。

庭園様式の成立前後をめぐる問題 　ただしわたしたちは、「庭園の成立前後」についていくつかの観点からこれまで試論的考察をおこなってきた。そこでは環状列石、古墳の葺石、磐座・磐境などを取り上げ、立石、州浜、石組など自然石による各種庭園技法に収斂される「造形的類似性」と「技術的背景」として参照してきたのである³。このような諸説の真否は今後の研究成果に期待されるどころだが、本論文が着目している問題の所在は「庭園“様式”の成立前後」にある。

庭園様式の成立前後をめぐる問題——それは、『作庭記』に記述された特徴を具備していた日本庭園というものが、具体的にどのような過程で独自性を獲得していったのかという点にある。古代日本においては、都市(都城)の計画原理としての条坊や、宮殿・寺院の建築などにみられる環境および空間デザイン、また政治、祭祀、経済その他の社会システムは、中国・韓国を中心とする東アジア文化圏の影響から生成されたものであることが指摘されている。そのような構図の前提に立てば、日本庭園という存在もまた同じ延長線上にスタイルを形成したと容易に考えることができるだろう。

スタイルの模倣と創造——そのランドスケープ史的考察　本論文は以上の前提をふまえ、日本にいとなまれた庭園が「日本庭園」としての様式的独自性、すなわち「日本的」なスタイルを獲得する前夜の様相を古代苑池という空間装置を用いて解き明かし、論じようとするものだ。その考察にあたっては、「模倣」と「創造」という概念が、重要な意味を帯びてくると思われる。なぜなら、日本庭園とは中国・韓国という東アジア文化圏のランドスケープがわが国に持ち込まれた段階で、ある部分は模倣され、ある部分はあらたに創造されつつ、一定のスタイルを獲得していったと考えられるからだ。ル・コルビジエが白紙を目の前にして「輝く都市」を構想したことがわたしたち日本人には想像のおよばないことであったのと同じように、古代日本のランドスケープ・アーキテクトが白紙を目の前にして「日本庭園」という姿を描いたとは到底思えない。作庭という創作行為は、参照されるべき何物かと、ある相対的な「関係」を取りむすぶことによってしか成り立ちえないのである。つまりそれは、ソックリに写す模倣の対象であったり、創造のための差異化の対象でもあったりするような、創作行為における「模範／反模範」という関係とでもいえるだろう。本論文では、いかなる部分が模倣され、また新たなスタイルとして創造されたのか、その点をまずは日本と韓国との関係に絞り、考察していくこととしたい。

II. 日韓における造園・造景の基本的技法

上記のような問題意識をもとに論考をすすめるにあたり、まずここでは、日本と韓国についての風景の意匠化、つまりランドスケープ・デザインの基本的技法を概説し、両者の相違を把握しておくこととしよう。

錦繡江山をうつす庭苑——韓国の造景技法　韓国では「錦繡江山」ということばが存在するように、自然そのものを美しい風景として愛でる自然観が基盤として形成されていた。その価値観の成り立ちについては、李朝時代の支配層が意図的に儒教文化の受容を誇示したことが誤解を招く一因であろうが、梶村の指摘⁴にあるように、韓国の文化は中国文化のコピーのみではなく、また朝鮮半島は中国文化の日本への単なる伝播の通路でもない。それはランドスケープの変遷からも明白な事実であることがわかる。たとえば三国時代から李朝時代に至るまで、往々にしてあらわれた露壇園（築壇）や花階などの造形は韓国で独自に形成された意匠でもあるが、ランドスケープの構成技法に通底する哲学は中国の園林、日本の庭園とも基本的に異なっている。この点について李御寧は韓国の庭苑について、「庭園という感じがしない自然そのままの錯覚を抱かせるのが、ほかならぬ彼らの理想とする造園術」だと説明している⁵。

韓国では、造園には「造景」の文字を用い、庭園も「庭苑」としているが、これは日本の庭園のように敷地を圍繞して理想的な空間・風景をしつらえるのではなく、すでに存在

する風景そのものを生け捕るがごとく場を設定し、「視点場－視対象」との間に成り立つ関係をランドスケープとして顕在化をはかるのである。これは実際に意匠化された空間・風景をみれば、雄大なスケールをもった造景とか庭苑ということばが妥当なことがわかる。

韓国庭苑が独自のスタイルとしてその姿をあらわすのは三国時代以降だが、特にその特徴は高麗時代に入ってから明確な輪郭を帯びはじめる。10世紀初頭に高麗朝を樹立（912）した王建は、自己の本拠地開京を国都とさだめ、宮殿の造営、坊里にもとづく都城の建設をすすめ、太祖の建国よりわずか2世紀の間に文化国家としての姿をあらわした。そのなかでは、都城内に十大寺刹を建立して建築様式の確立もすすめたほか、権臣によって紀綱の紊乱した時期には文字・芸術が栄え、ここに世界最古の活字印刷もはじまったのだった。芸術のなかでは高麗青磁の発達がよく知られているように、造景においてもめざましい展開をみた。時の王第18代毅宗の統治時代（1146－1170）を中心として、韓国造景にひとつの到達点が示されるのである。当時の施主は、新羅時代と同様に王族が筆頭にあげられるが、権臣の私邸にも造景がなされたほか、ことに隠退した高官らが江湖の名勝地や山間部を選んで山荘や別荘を造営し、そこにひとつの境地をつくったことが特に注目されるのだ。具体例をあげると、宮苑の筆頭としては高麗の正宮だった延慶宮（満月台）がある。開城はもともと松都とも称されていたが、この地には松岳山をはじめとして南山、万寿山など四方を松山に囲まれており、延慶宮はその松岳山麓北の高台に造営されている。宮殿の東西には2つの川が流れ、竜首、子男、進風などの諸山がみえる景勝地そのものを庭苑化したものだ。松林に囲まれた場所には、賞春亭、山呼亭などの四阿が配置され、建築そのものを庭苑の唯一の点景物と設定し、さらに四阿を視点場にして雄大に広がる天然風景を庭苑の視対象としている。このような庭苑技法は高麗時代に定着し、美郿瓊の城南別墅（1016）、李資謙の山齋（1112）、李公升の園中菜亭（1182）、李公遂の別墅（1367）でも同じ方法がこころみられている。李朝時代に入ってから、原寸大の自然を庭苑として造景するスタイルは昌徳宮の秘苑などに継承され、宮殿では特に「後苑」という空間が重要な意味を帯びていくのである。また、全羅南道潭陽郡の別墅瀟灑園は韓国庭苑に通底する自然主義的かつ風景式を基調としたスタイルの極致である。本庭苑は築壇式としつつも自然の地形を最大限に生かして、溪流や滝など水景をダイナミックに表現した場として築造されている。苑内で溪流、滝、水碓などの風景を楽しみ、詩を詠んで日々を暮らすというのは、文字どおり山荘生活における理想的な環境を実体化・具現化したものであり、自然に基本をおいた造景であったことは間違いない⁶。

以上、韓国庭苑に通底するランドスケープの哲学は、自然そのものを苑内で実体化し、亭や橋などの人工物は最小限にとどめるということが造景の基本的考え方だと指摘できる。生得の山水をおもはへて——日本の造園技法 次は日本の庭園様式史を概観すると、平

安時代には仏教とのかかわりとして浄土思想が庭園に大きな影響をおよぼし、寝殿造系造園の誕生以降はあらたな展開として平等院鳳凰堂庭園、毛越寺庭園などに代表される浄土庭園というスタイルを確立した。その後鎌倉時代から室町時代にかけては夢窓疎石を中心とした禅僧の作庭家によって構想された天龍寺や西芳寺に代表される禅の庭を生み出した。そのいっぽう、中世は善阿彌など山水河原者という造園の技術家集団が勃興するなど、数多くの庭園史的現象が顕現される時代でもあった。そして江戸時代に至って確立された桂離宮、浜離宮などの回遊式庭園は、これまでの庭園文化を総合化した様式として、日本庭園のひとつの到達点を示している。

そのような日本庭園に通底する一貫した造園への基本的態度は、「自然を縮める」ことに集約される。先述した『作庭記』にもこのことが明快かつ端的に示されている。たとえば、「国々の名所をおもひめくらして、大姿をそのところになすらへて、やはらけたつへき也」とか、「生得の山水をおもはへて、その所々は、さこそありしかと、思ひよせおもひよせ立つべきなり」という記述だ。これらは立石に関する記述だが、すべての作庭という行為はダイナミックな自然の要所をしっかりと把握して、庭園の規模に応じて縮小し、空間化を図ることが基本となる。つまり「縮景」だ。

縮景とは、平安時代に確立され、中世・近世にも通底する手法として継承されたものだが、その原初の形態は「海景表現」にあったといえる。すなわち、池の岸辺に「入江」(湾)、「州浜」(海浜)、「荒磯」(海岸)といった海景にかかわる風景を、文字どおり縮小してあらわす技法をいう。縮景は海景表現のみにとどまらず、山岳としての築山、田園としての野筋、瀑布としての庭滝などといったように、風景のあらゆるものが平安時代後期から室町時代に至るまで作庭の題材として咀嚼されていくのだった。以後この技法は江戸時代に至り、桂離宮における天橋立、小石川後楽園における大堰川・西湖・小廬山・白糸滝、六義園の和歌浦、水前寺成趣園における富士山などのように、各地の名所風景を縮小化して、庭園に取り込む技法に変容していくのだった。

日韓のランドスケープにおける自然と造形の構造　このように、自然そのものを原寸大で表現する韓国の庭苑と、内部空間に自然の要所を象徴的に抽出・縮小した風景をつくるわが国の庭園とは、実はまったく異なるベクトルによって成立していることがわかる。つまり自然と造形へのアプローチの違いこそが、日韓それぞれのランドスケープにおけるスタイルの独自性であると指摘できるだろう。

韓国のスタイルが定着するのは高麗建国の10世紀頃と考えて間違いなく、また日本の縮景というスタイルが一般化するのには、平安時代において貴族邸宅や寺院に優美な庭園が登場した9世紀頃とみられる。以上から、おおむね日韓両国の様式は9～10世紀前後にそれぞれの独自性を獲得していったものと考えられる。

それでは、日本庭園がスタイルにオリジナリティを獲得する以前の7～8世紀の庭園（苑池）は、具体的にいかなるかたちを有していたのだろうか。実は、韓国における古代苑池と比較してみると、「模倣」と「創造」という対立概念が実に混沌としたなかで誕生したものであったことが如実に物語られていたのである。

Ⅲ. 模倣からの出発——百済から飛鳥に持ち込まれた「方池」

百済の帰化人・路子工が示した須弥山と呉橋 物部氏との戦いに勝利した蘇我馬子は東アジア文化圏に急速に浸透しつつあった仏教を正式に導入するため、崇峻元年（588）、飛鳥寺の建設にふみきった。わが国最初の仏教伽藍の建設である。そして翌年、隋が中国を統一したことを契機としてわが国と朝鮮半島の三国（百済・新羅・高句麗）とは急速な国際化の波にのまれていくのだった。飛鳥寺の建設というのは、渡来系のひとびとを配下に擁し、国際情勢に敏感だった蘇我氏のとった行動として飛鳥時代を象徴する出来事であったといえる。なぜなら飛鳥寺の造営は、寺工・鑑盤博士・瓦博士・画工など百済の渡来人によって建築・仏像・絵画・工芸などあらゆる大陸文化の受容をすすめるきっかけとなったからである。

大陸文化の受容は、苑池の空間デザインについてもその例外ではなかったことが『日本書紀』、『万葉集』などの文献資料に示唆されている。たとえば、推古天皇の宮殿として造営され、奈良時代に至るまで離宮として存続していた小墾田宮については、推古朝時代における宮苑の記事が『日本書紀』にみられる。

「仍令構須弥山形及呉橋於南庭。時人号其人曰路子工。亦名芝耆磨呂」（『日本書紀』推古天皇二十年是年条）

路子工とは、百済から渡ってきた飛鳥時代の帰化人である。彼はその顔や身体に白い斑点があり、白癩であったためにひとびとから嫌われ、海中の島に捨てられそうになった。しかしその男は「もし自分の白斑を嫌うならば、白斑の牛馬を国中に飼うべきではない。自分にはいささか才があって、よく山岳の形を構えることができる。自分をとどめて用いれば、きっと国のために利があるであろう。どうして海中の島へ捨てることがあろうか」といった。そこで彼を許し、「須弥山の形」と「呉橋」をつくらせたのである。

この記事から、推古天皇の小墾田宮南庭には呉橋とよばれる橋と須弥山の造形があったことがわかる。須弥山とは、山の頂上が広く四隅に山岳をもち、法隆寺の玉虫厨子や東大寺の毘盧遮那仏台座蓮華彫にも描かれているように、仏教では世界の中心たる聖山を意味する。須弥山頂上の中央には炉羅綿でできた善見城があり、その四辺には衆車・蠱惡・相雜・歡喜の各遊苑がおかれ、宴遊のために欠かすことのできない装置としての役割も担っていた。また善見城外の北東隅には、花と葉の香りが遥か彼方まで届く円生樹が植栽され

ているなど、人間の理想的環境がイメージとして重ねられ、庭園のモチーフに移行する潜在性を十分に具備したものだ⁷。路子工が小墾田宮南庭につくった須弥山がどのようなものかは明確ではないものの、「呉橋」ということばが示唆するようにこの場所には池が存在していたと考えられる。つまり宴遊の一装置としての須弥山、視点場となる装置としての呉橋を百済出身の路子工が示したことを考えると、わが国の古代苑池の先駆的姿景は、朝鮮半島三国のなかでも百済との関係から成立した可能性が指摘できる。

百済と飛鳥の「方池」デザイン　それでは、百済と飛鳥地域の苑池にはどのような特徴があるのだろうか。この2地域の苑池を比較すると、その平面計画に奇妙な一致がみられる。「方池」とよばれる四面を直線護岸で構成した方形パターン⁸の苑池である（第1表）。

百済の苑池にかかわる最初期の記述は『三国史記』辰斯王七年条の「春 正月 重修宮室 穿池造山 以養奇禽異卉」というものだが、不明の点が多く造営地についても漢江流域の夢村土城と風納土城が候補地として議論されているだけだ。

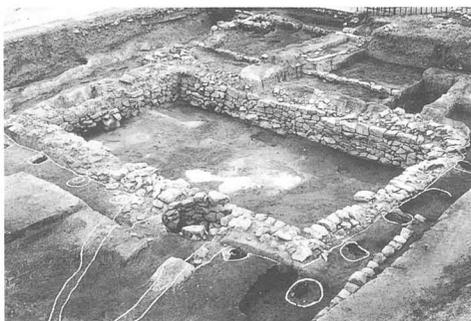
苑池の形態が発掘調査で確かめられた事例には公山城がある。『三国史記』東城王二二年条には「春 起臨流閣於宮東 高五丈 又 穿池養奇禽」との記述があり、さらに1987年の発掘調査の結果、長方形の石築苑池が確認された。また、同じく扶余の宮南池についても、『三国史記』武王三五年条に「春 三月 穿池於宮南 引水二十余里 四岸植以楊柳水中築島嶼 擬方丈仙山」とあり、方池にヤナギを植栽したものであった。ほかにも百済で確認された苑池には定林寺跡（第1図）、扶余王宮跡推定地（第2図）、益山弥勒寺跡の3つがある。これらのうち、定林寺跡と益山弥勒寺跡は境内地に2つの方池をとこなうものだが、いずれもその平面計画は方池を基調としているのである。

第1表 韓国と日本の方池

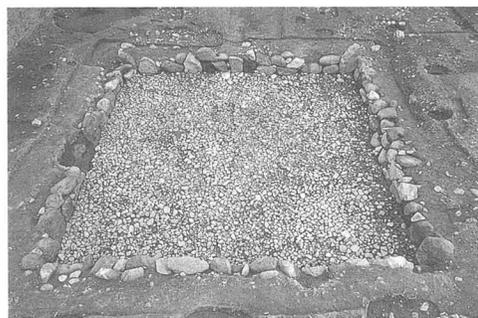
	名称	築造年代	規模 (東西m×南北m)	深さ(m)	護岸構造	池底	備考
韓国 (百済)	定林寺跡東池	6世紀中頃	15.3×11.2	0.5	石積み+素掘り	地山	蓮池
	定林寺跡西池	6世紀中頃	11.2×11.0	0.5	石積み+素掘り	地山	蓮池
	扶余王宮跡推定地	不詳(百済時代)	10.6×6.2	1.0~1.2	雜割石野面積み	地山	蓮池
	益山弥勒寺跡東池	7世紀末	51.0×48.0	1.2	素掘り(一部石積み)	地山	
	益山弥勒寺跡西池	7世紀末	54.5×41.0	1.6	素掘り(一部石積み)	地山	
日本 (飛鳥)	島庄遺跡	6世紀末~7世紀初頭	42.0×42.0	1.0~2.0	川原石野面積み	石敷	貯水池?
	石神遺跡方池A	7世紀中頃	6.0×6.0	0.8	川原石野面積み	石敷	
	石神遺跡方池B	7世紀後半	3.0×3.2	0.6	石列(部分的に2石積み)	石敷	
	坂田寺跡	7世紀前半	6以上×10以上	1.0	石積み+素掘り	地山	蓮池
	平田キタガワ遺跡	不詳(飛鳥時代)	250以上×未確認	1.5内外	川原石野面積み	石敷	
	雷丘東方遺跡	不詳	未確認	1.5~2.0	川原石野面積み	未確認	
	飛鳥池遺跡	7世紀後半	7.9×8.9	1.6	石積み	石敷	貯水池?



第1図 定林寺跡方池



第2図 扶余王宮跡推定地



第3図 石神遺跡方池A



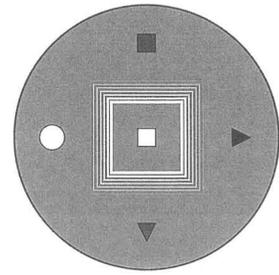
第4図 石神遺跡方池B

飛鳥地域においても、石神遺跡（第3・4図）、島庄遺跡、飛鳥池遺跡、坂田寺など、方池とみられる苑池遺構が多数確認されている。このうち、島庄遺跡と飛鳥池遺跡で確認された方池は水深が1m以上と深いことなどから貯水用の池であった可能性もあるが、石神遺跡の方池は給排水にともなう施設がみられず、池中内の堆積土からも常時水が溜まっていたものではないという発掘調査知見と、『日本書紀』にみられる蝦夷あるいは外国からの使節来訪との記述が数回にとどまるという一致から、服属饗宴にともなう苑池だと推定されているほか、坂田寺の方池が池底に石敷をとまわらないため、仏教思想にもとづく蓮池だと推定されてもいることから⁸⁾、わが国でも百済と同じように、方池としての苑池が造営されていたと考えてよからう。

日韓の方池の比較をこころみた高瀬によれば、飛鳥にみられる方池はその池底が坂田寺を除きすべて石敷となっているのに対し、百済のものではすべて地山面を池底としているという相違が指摘されている。そして定林寺跡、扶余王宮跡推定地からは蓮の葉や茎が出土しており、池として存続していた時期は蓮池とした空間で、池底に石敷をとまなう多くの飛鳥の方池とは異なる側面を持っていたという。また、飛鳥では石組の水路や掛樋を用いて導水したと考えられる例が多いのに対して、百済の方池は人工的な導水施設を設けず、湧水や谷水を水源としていたようだ⁹⁾。

このように、飛鳥と百済の方池はその意匠・構造において相違も認められるのだが、日

韓両国において方形の平面計画を有する池があまりにも多数みられるのは奇妙だといえないだろうか。つまり飛鳥に立ち現れた方池という空間デザインは、都市・建築・美術・工芸等にみられる飛鳥の諸造形が大陸の文化を多分に引用したものである以上、方池のみがわが国オリジナルの造形だと指摘するのは困難であり、飛鳥の方池は百済から持ち込まれた可能性が高いという考え方が成り立ちうるということだ。その傍証として、百済の方池について築造年代の最古といえるのが定林寺跡の6世紀中頃¹⁰で、飛鳥では最初期の島庄遺跡の方池が6世紀末～7世紀初頭⁹、坂田寺跡の方池が7世紀前半であり⁹、まず方池の出現年代は百済の方が早く、時期的な矛盾点がない。かつ路子工が須弥山と呉橋をしつらえた苑池をとまなう小墾田宮推定地が古宮遺跡から雷丘東方全体に射程幅が拡大され、さらに近年の研究ではむしろ方池が確認された雷丘東方遺跡が小墾田宮南庭の可能性が高まりつつある⁸という点もこの点を補強しているといえるだろう。したがって本論文では、飛鳥の方池は当初百済において確立された空間デザインが路子工など百済出身の渡来人によって導入され、7世紀前半を中心に流行したという仮説を提示しておきたい。



第5図 須弥山（中央の正方形）

思想的力学による現象としての方池 飛鳥を通底する方池の起源については、これまで秋山と外村、そして高瀬による論考がある。秋山は島庄遺跡の方池が蘇我馬子の嶋宮の池としてはじめにつくられ、後に中大兄皇子、大海人皇子、草壁皇子の嶋宮として伝領されていったとまず考えた。そのうえで方池の起源は、① 観音経曼荼羅に描かれている浄土世界にある水面の形、② 方墳や飛鳥水落遺跡などにみられる方形区画が施設の基本となっていた、という2つの背景によって成立したと考察した¹¹。外村は、7世紀初期においては浄土思想や浄土教絵画がまだ流行していなかったとして、方池デザインの起源は中国の天円地方説に関連する土木設計技術に由来すると考察した¹²。高瀬は方池に通底する空間デザインは仏教思想にもとづくものであると仮定し、浄土世界に描かれた水面の取り扱いが反映した造形と理解している。浄土変相図に描かれた広大な水面に浮かぶ多くの建物基壇によって区画されたネガティブな形としての方形の水面図象から、方池や蓮池のデザインが実体化されたと考えたのである¹³。

また、苑池との強い結びつきが考えられる須弥山についても、これは仏教世界における世界の中心たる聖山だが、その平面計画は完全な正方形であり、苑池という空間存在と正方形との強い結びつきが看取される（第5図）。いずれにしても、正方形を「水面」というヴォイドとして空間化をなしたことの背景には、東アジア文化圏のなかで一定の国家的地位を獲得しようとしたわが国にとって、ある意味導入せざるをえなかった古代東アジアの思

また、苑池との強い結びつきが考えられる須弥山についても、これは仏教世界における世界の中心たる聖山だが、その平面計画は完全な正方形であり、苑池という空間存在と正方形との強い結びつきが看取される（第5図）。いずれにしても、正方形を「水面」というヴォイドとして空間化をなしたことの背景には、東アジア文化圏のなかで一定の国家的地位を獲得しようとしたわが国にとって、ある意味導入せざるをえなかった古代東アジアの思

想的力学が、大きなうねりをもって空間形成に作用したことは間違いないだろう。

IV. 日本的スタイルの創造——「曲池」から「池泉」へ

移行するブームタウン——韓国と日本　新羅は建国当初は高句麗、百濟よりも発展が遅れたが6世紀から急速に発展した。660年には百濟を滅ぼし、668年には高句麗をあわせ、676年に三国を統一した。新羅の三国統一はそれまで分裂していた種族、文化、言語の統一を促進した点で、きわめて重要な事象であったといえる。新羅は、政治・経済・軍事等にかかわる諸制度を再編成して安定した社会基盤を築きつつ、唐文化を積極的に摂取し、建築・美術・工芸分野において韓国独自の卓越した文化を創造したからだ。仏国寺、海印寺、浮石寺などの寺院建築や石窟庵の十一面観世音菩薩や本尊像などの仏像に代表される仏教美術、その他金銀の細工品や螺鈿漆器、絹織物などは、統一新羅時代における文化水準の高さを物語るものである。国都に定められた慶州では、規則的な道路配置を基調に宮殿、官衙、寺院などの建築物が配置され、巨大都市・新羅王京が建設された。7世紀後半において建設ラッシュを推し進めた慶州は、韓国におけるあらゆる都市文化を生成し、情報を発信するブームタウンとなったのである。

そしてわが国の宮都の変遷をたどってみても、韓国と同じようにブームタウンは移行している。その特徴はスパンがきわめて短いことだ。6世紀末に本拠地を飛鳥に移した蘇我氏が推古天皇を豊浦宮で即位させて以来、小墾田宮、岡本宮、田中宮、百濟宮、板蓋宮など狭い飛鳥の地域に次々と宮が造営された。大化改新（645）の一時期は難波に、白村江の敗戦後（663）の戦時体制化では近江大津に移されるが、壬申の乱（672）の後にはふたたび飛鳥に戻っている。その後持統天皇の代において、朱鳥九年（694）にわが国初の都城として藤原京の成立をみた。そしてさらに和銅三年（710）には奈良の平城京に遷都して中央集権体制を整備している。このように7～8世紀における国都は飛鳥・藤原・平城のように移行してきたのだが、その過程のなかで7世紀を中心として、唐の建築様式と技術を積極的に取り入れた百濟大寺、山田寺、川原寺などの寺院建築、薬師寺金堂薬師三尊像や薬師如来像などの仏教彫刻、法隆寺金堂壁画などの絵画に代表される白鳳文化が形成され、その後8世紀に至り、唐招提寺、東大寺正倉院宝庫などの寺院建築、興福寺阿修羅像、唐招提寺鑑真像などの彫刻などに代表される天平文化を生み出したのだった。

慶州における「曲池」の登場　さて、上記のように都市建設ラッシュがすすめられ、ブームタウンとなり飛躍的に文化レベルを向上させた韓国の慶州では、統一新羅時代の3箇所の苑池が確認されている。雁鴨池（月池）、龍江河苑池、九黄河苑池だ。これら3苑池が百濟のものとは異なるのは、百濟において支配的な空間形態であった方池ではなく、「曲池」とよばれる池の汀線に自然曲線を特徴的に用いたタイプだった点にある¹⁴。

まず慶州で確認された3苑池の概要を整理しておこう。雁鴨池は、慶州盆地の中央部やや南よりの平坦地に立地している。『三国史記』によれば、文武王十四年（674）条に「二月宮内穿池造山 種花草 養珍禽奇獸」とあり、同文献の文武王十九年（679）条の記述にみられる「東宮」と考えられている。これら『三国史記』の記述は、1975～1976年におこなわれた発掘調査の出土遺物のなかで「儀鳳四年皆土」（679）と書かれた瓦や、「調露二年」（680）と書かれた銘磚によっても裏づけられているため、苑池の築造時期は674年とみて間違いない。苑池の全体構成は、東西約200m、南北約180mの池を中心として、その西側と南側に建物を配置したものだ。池中には3つの中島を配置し、池の北側および西側は築山が連なるように造成されている（第6・7図）¹⁵。

龍江洞苑池は、慶州盆地の北部を流れる北川のさらに北側の平坦地に立地する。発掘調査の結果、池の築造年代は統一新羅時代前半の8世紀と推測されている。苑池の全体構成は発掘調査が部分的であるため不明の点が多いが、池を中心として池中に2島を配置し、池と連続性を持たせるような形で橋と建物を池の西側に設置している点に特徴がある（第8図）¹⁶。

九黄河苑池は、慶州盆地の北側、芬皇寺の東側に隣接しており、敷地は南から北に傾斜しつつ北川とも隣接している。苑池は敷地の南西に存在した建物跡の北端を構成する築台を境界としてその北側に展開し、池中には2島の中島を有する。また、敷地の北側および西側は堀で囲繞されていたようだ（第9図）¹⁷。

これら3つの苑池に共通する特徴は、汀線に自然曲線を用いることによって自由な平面を獲得したということだけではなく、池中に中島を配置して景趣をととのえ、建物や橋など

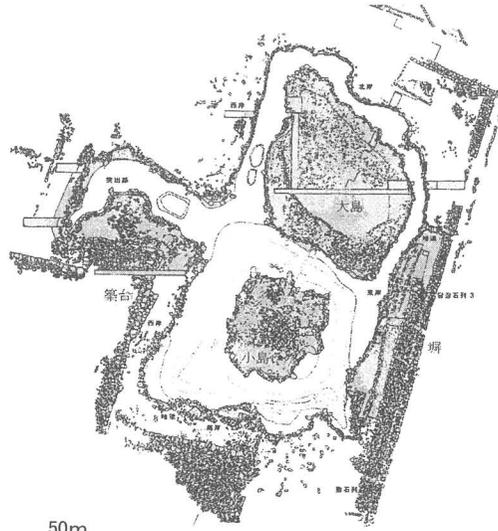


第6図（左） 雁鴨池航空写真

第7図（上） 雁鴨池遺構検出状況
（東岸の護岸状況）



第8図 龍江洞苑池遺構平面図



第9図 九黄洞苑池遺構平面図

の構築物を有機的に苑池に配置することにより、視点場（構築物）と視対象（苑池の意匠）との「関係」を顕在化しているという点にある。特に苑池の細部意匠に関しては、池の護岸などは方形の加工石による布積み、あるいは自然石による野面積みとする単純な部分を基本とするが、屈曲する汀線の突端部分に自然石を立石として点景的に使用する点や、雁鴨池、九黄洞苑池ではそれぞれ導水、池尻部分に水流をしつらえ、「水景」を意識した観賞的な造形態度が十分みてとれる点にその特徴が指摘できる。

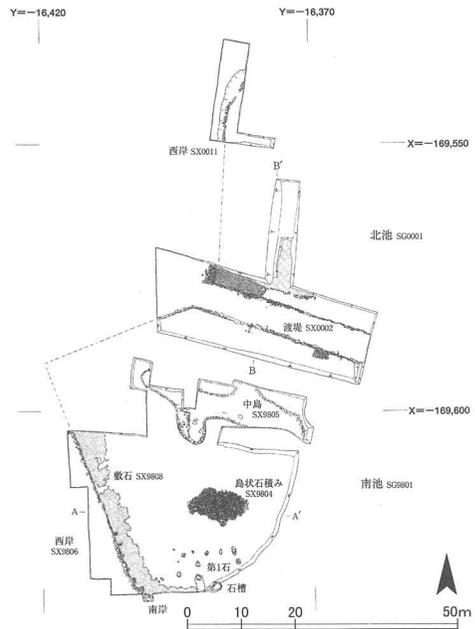
慶州におけるこのような曲池は、新羅が三国統一をはかった7世紀第4四半世紀に登場するものである。ただし最初期に目される雁鴨池の様式・意匠をみるかぎり、きわめて完成された形で空間化がはかられている点に奇妙な疑いも生じてはこないだろうか。すなわちここで浮上する疑惑とは、雁鴨池にあるような完成された苑池のスタイルが突如として立ち現れるとは到底思えないということであり、完成されたスタイルへの移行過程に築造された「不完全な曲池」あるいは、「曲池スタイルへの推移形」とでもいうべき苑池は存在するのかということだ。しかし残念ながら韓国ではそのような苑池は確認されていない。わが国ではどうか。

飛鳥における「曲池」スタイルへの推移形——飛鳥京跡苑池遺構 飛鳥の苑池は方池が支配的なスタイルであったが、小ぶりの自然石で流れと小さな池をしつらえた遺構として上之宮遺跡、古宮遺跡など数例が確認されている。たとえば古宮遺跡では、幅が25cm内外の蛇行する流れと長径約2.8m内外の不整形の小池が確認されているが、相原も指摘しているように、水を使用した祭祀・儀式の場である可能性も高く、このタイプのものは苑池

であるという断定はできない⁸。

しかし、飛鳥浄御原宮に関連した施設としてきわめて興味深い遺構が平成11年(1999)に発見された。飛鳥京跡苑池遺構である。本遺跡は従前より苑池として周知されておらず、奈良県立橿原考古学研究所の発掘調査によって確認されたものだ。なお、この場所については大正5年(1916)に水田の水路を掘削中にこの場所から自然石に流水のための加工を施した出水石造物が偶然出土し、その後京都・野村氏碧雲荘に運搬されたことはよく知られているところである。

本苑池について検出された遺構の状況をみてみよう。橿原考古学研究所の報告によれば、池は渡堤によって北と南に二分され



第10図 飛鳥京跡苑池遺構平面図

ていることがわかる。池の平面形に着目すると、北池・南池ともに直線を基調とした地割構成で石積みによって護岸が意匠化されており、おおむね池底の敷石から石積みの天端に至るまでは、自然石を4ないし5石を胸高程度まで積んでいる。北池は護岸の部分的な位置が確認できるのみでその他の庭園構成要素については不明だが、南池はややいびつな東西に長い自然曲線により造形された中島を浮かべ、その南側には岩島の原型とも思われるような楕円形の島状石積みを配置している。ただし、中島の護岸は自然石による直立気味の単純な野面積みであり、慶州で確認された龍江洞苑池遺跡、九黄洞苑池遺跡の基本的護岸形態とほぼ同じ様相を呈する意匠である(第10図)¹⁸。

飛鳥京跡苑池遺構の平面計画は直曲線形の混交により空間デザインがなされている点に特徴が認められる。しかしながら、池の護岸にみられる直線形と中島にみられる曲線形とが、少なくとも美的調和に優れたものとはいいがたく、風景としてのバランスを欠いたものにみえてしまうのはなぜか。これを7世紀前半に流行した直線形を基調とする方池スタイルから、7世紀第4四半世紀から8世紀にかけて慶州で流行した曲池スタイルへの移行過程を示す直線と曲線の分裂的折衷空間として解釈できないだろうか。本論文がこのような仮説を提示できるのは、その傍証に飛鳥京跡苑池遺構の池の最初期の築造年代、そして新羅と日本の国交関係に時期的符合が指摘できるからだ。

まず池の築造年代については、南池の池底は石敷が二重になっている箇所があり、改修の可能性があると指摘されている。ここで池の当初年代と改修年代の指標となる出土

土器に着目すると、南池の石敷が二重と一重になっている部分のそれぞれ上面より出土した土器群の時期相は飛鳥から平安時代に至るまでの大きな範囲にあり、その中心は飛鳥Ⅳに該当する7世紀第4四半世紀である。いっぽう、二重の石敷間に出土した土器は少量ながら飛鳥Ⅳに下るものではなく、7世紀半ばから第4四半世紀に該当することから、二重の石敷間から出土した土器群は池の築造当初年代から改修直前に至るまでのものを含んでいるといえる¹⁸。以上の出土土器群と石敷との関係から想定される苑池の当初年代は天武朝以前と指摘することができ、したがって飛鳥京跡苑池遺構は慶州で曲池スタイルが流行する7世紀第4四半世紀から8世紀よりも先立つ築造事例ということが確定される。

次に、7世紀半ばから第4四半世紀における日本と新羅との関係をみてみると、天智二年（663）の白村江の戦いで大敗した日本は新羅とはしばらく国交が途絶えていたが、天智七年（668）年9月に新羅使が来日し、日本はそれに応じて国交を再開している。これは百済および高句麗を滅ぼしたのち、その領土の直接支配を企図する唐との間にズレが生じつつあった新羅と、当時唐の動向を恐れていた日本との利害が一致したからだが、両国の使節はほぼ連年あるいは隔年に往来し、天平六年（734）に至るまで密接な交流が展開されている。このように、7世紀第4四半世紀以降は新羅と日本が密に行き来した時期であり¹⁹、この過程で慶州の曲池スタイルが持ち込まれた可能性が十分考えられる。その曲池スタイルの初歩的模倣段階で築造された苑池のありようを飛鳥京跡苑池遺構は如実に反映した空間と考えられるのだ。

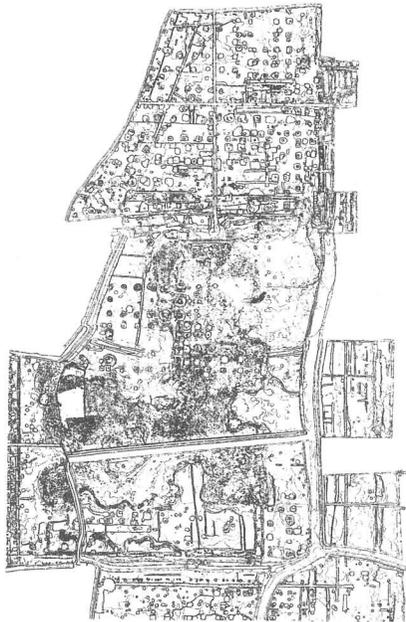
つまりわが国の苑池は、7世紀前半を支配した方池スタイルのものから、7世紀半ばから第4四半世紀にかけてその平面計画に若干の自然曲線を加味していくという変容が起こった。その空間計画に射程される模範対象は新羅の苑池に向けられていたと本論文では考える。しかしながら天武朝誕生前において造営された苑池は、飛鳥京跡苑池遺構をみるかぎり完成された曲池とはいいがたく、直線と曲線の分裂的折衷あるいは、「擬曲池風庭園」とでもいうべき、方池から曲池への移行過程に示されたデザインだったのである。

奈良時代の苑池と平城宮東院庭園 上記の擬曲池風庭園とでもいうべきスタイルは、奈良時代にどのように変容していくのかを次に考えてゆこう。奈良時代の苑池遺構には発掘調査から26例が確認されているが、このうち21例が平城宮および京域に所在しており（第2表）、宮殿・離宮・貴族邸宅などにもなう施設のひとつとして多数の苑池が築造されていたことがわかる²⁰。

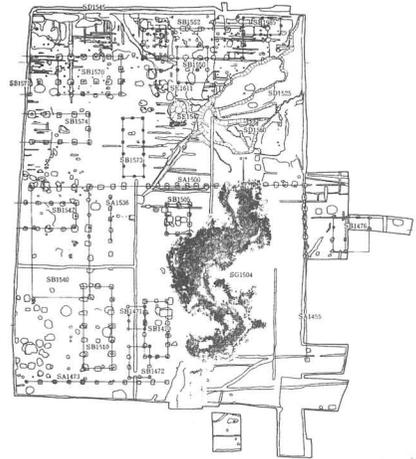
ここで奈良時代苑池の特色として指摘できるのが、池の汀線に屈曲を加えることによって自由な平面を獲得した「曲池」が支配的なスタイルとなっていることだ。また、特に平城宮東院庭園（第11図）、平城京左京三条二坊六坪宮跡庭園（第12図）では、池の護岸に州浜や景石を用いた複雑に出入りする汀線を基調としており、いびつな平面をもった飛鳥京跡

第2表 平城宮・京域における苑池遺構

名称	種別	築造年代	平面形	規模 (東西m×南北m)	深さ(m)	護岸構造	池底	中島	立地など
平城宮東院庭園最下層苑池	宮殿	8世紀初期	逆L字形	45×60	0.4~1.0	玉石積み・玉石張り と素掘りか?	地山	なし	丘陵下段の低地
平城宮東院庭園下層苑池	宮殿	8世紀中頃	曲池	45×60	0.4~0.5	玉石縁石・州浜	護岸沿いに玉石敷き、 中央部は地山	なし?	丘陵下段の低地
平城宮東院庭園上層苑池	宮殿	8世紀後半	曲池	60×60	0.3~0.4	州浜	礫敷き	不整形	丘陵下段の低地
平城宮佐紀池	宮殿	神龜年間	曲池	220×140	未確認	州浜(幅2m)	地山	なし	谷地形に築造
平城宮西南隅庭園遺構	宮殿	8世紀後半?	隅丸方形 (東南隅)	22以上×10以上	1.5	しがらみ(南岸)	地山	なし	秋篠川の旧流路を利用。 遊水池か?
平城宮大膳職庭園遺構	宮殿	8世紀後半	曲池	18×17	0.8	素掘り	地山	なし	丘陵上の平坦地
平城宮北辺地城庭園遺構(市庭古墳)	宮殿	8世紀中頃	曲池?	18×22以上	0.6	州浜(葦石転用)	地山	なし	市庭古墳外濠を転用
松林苑跡庭園遺構(猫塚古墳)	宮殿	8世紀前半?	曲池?	未確認	未確認	州浜?(葦石転用?)	地山	墳丘が中島?	猫塚古墳濠を転用
松林苑跡庭園遺構(大和20号古墳)	宮殿	8世紀前半?	L字形?	幅4~5	未確認	州浜(葦石転用)	地山	墳丘が中島?	大和20号古墳濠を転用
平城京左京一条三坊十五・十六坪庭園遺構	貴族邸宅	8世紀初期	曲池	18×10	0.25	州浜(葦石転用)・ 景石護岸	地山	なし	平塚2号墳前方部斜面、濠を転用
平城京左京二条二坊十二坪庭園遺構	離宮?	8世紀中頃	曲池	7.7×10.5	0.23以上	玉石張り?	地山	なし	古墳時代の旧流路上に池を穿つ
平城京左京三条一坊十四坪庭園遺構	貴族邸宅	8世紀初期	曲池	8.5×6.5以上	0.2~0.3	素掘り(中島は一部礫敷き)	地山	あり	敷地は十三、十四坪の2坪利用か? 平坦地
平城京左京三条二坊六坪庭園遺構(宮跡庭園)	宮殿	8世紀中頃	曲池	幅2~7、長55	0.1~0.3	玉石縁石・玉石張り・ 州浜	玉石敷き(一部敷石なし)	なし(岩あり)	旧流路を埋め、同位置に池を築造
平城京左京三条二坊二坪庭園遺構(長屋王邸)	貴族邸宅	8世紀初期	曲池	14以上×10以上	0.2	州浜	地山	なし	平坦地
平城京左京三条二坊七坪庭園遺構(長屋王邸)	貴族邸宅	8世紀初期	蛇行流路	幅3~7×70以上	0.9	素掘り	地山	なし	菰川旧流路を利用
平城京左京三条四坊十二坪庭園遺構	貴族邸宅	8世紀中頃	曲池	3.7×4.9	0.4	素掘り	地山(底に玉砂利あり)	なし	平坦地
平城京左京八条一坊三坪庭園遺構	貴族邸宅	8世紀前半	曲池?	幅5~9×30以上	0.5~1.7	素掘り(一部しがらみあり)	地山	なし	河川旧流路を利用。貯水池か?
平城京右京一条北辺四坊伝称徳天皇御山莊庭園遺構	離宮	8世紀後半	曲池?	55×20	未発掘	未発掘	未発掘	あり	谷奥に築堤し池造成
法華寺旧境内庭園遺構	寺院	8世紀後半	曲池?	2.7以上×10	0.4	玉石張り・礫敷き(幅1m)	地山	未確認	平坦地
法華寺阿弥陀浄土院	寺院	8世紀後半	曲池?	40以上×50?	0.3以上	玉石張り・景石	玉石敷き(一部敷石なし)	あり、東西12.5m	低丘陵下段の低湿地
百毫寺遺跡庭園遺構	離宮?	8世紀	曲池	21×7.5	1.0	素掘り	地山	なし	舌状台地先端部



第11図 平城宮東院庭園遺構平面図



第12図 平城京左京三条二坊六坪宮跡庭園遺構平面図

苑池遺構とはまったく異なる様相がみてとれる。奈良時代の苑池の空間デザイン上の全体的な特徴を概観すると、平城京左京三条二坊六坪宮跡庭園や平城京左京一条三坊十五・十六坪苑池遺構、法華時阿弥陀浄土院苑池遺構などの事例のように、立石・景石による護岸石組と州浜との組み合わせにより土留めだけではなく景趣をもとのえようとする「観賞」を重視した空間設計、また苑池のしつらえを効果的に見せる場（視点場）として池を臨むような形で建物を配し、その建物もまた庭園から臨んだ際の風景の一構成要素としての機能（視対象）も兼備させるという「庭園建築」の登場、そしてその景観美に配慮された苑池については、外部の異なる文脈において成立している施設群との視覚的関係の切断のために、また反対に庭園の背景として効果的な構成要素となりうる山並みなどの視覚的顕在化のために、築地堀・板堀といった遮蔽施設をピクチュア・フレームのごとく用いた空間の「圍繞化」、などの諸点が特筆すべきこととしてあげられる。このように苑池の空間デザインは飛鳥時代から奈良時代にかけて劇的に変容していくわけだが、その具体的推移過程を実態として示した興味深い苑池遺構が存在する。平城宮東院庭園だ。

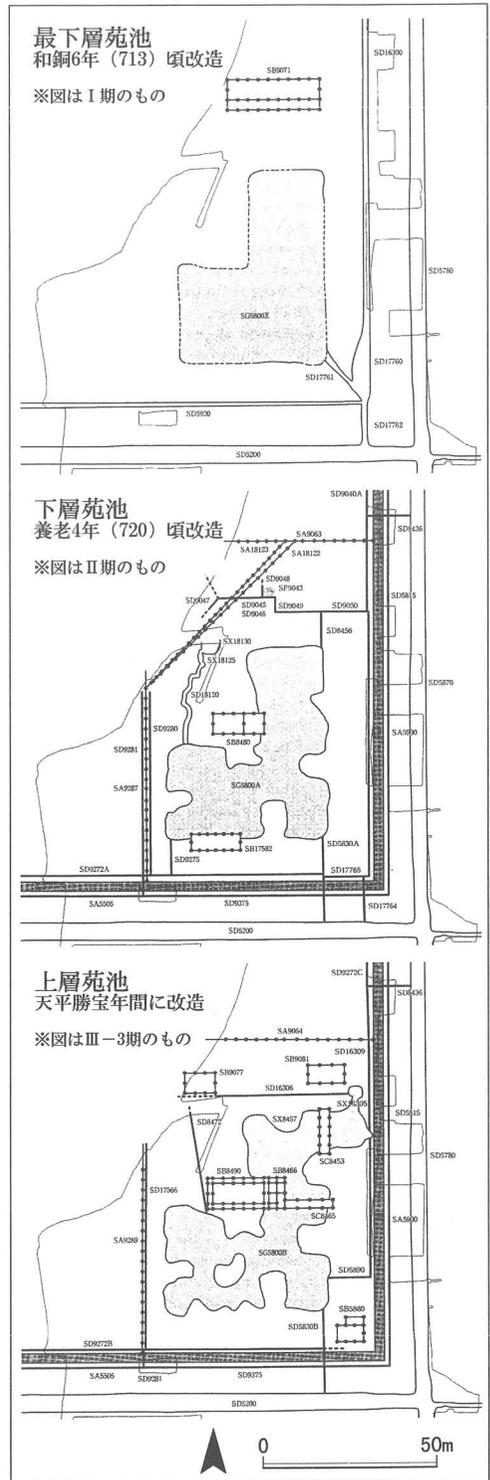
東院庭園とは、平城宮が東に張り出した南半部分、すなわち平城宮東院地区の東南隅に位置する苑池である。東院庭園という名称は便宜的によばれているもので、苑池部分を特定した奈良時代の名称は不明である。ただし『日本書紀』には「楊梅宮南池生蓮。一莖二花」と記述されており、ここにみられる「楊梅宮南池」が東院庭園の池にあたる可能性が高いと考えられている。発掘調査所見によれば、苑池は藤原宮から平城宮に遷都（710）後の和銅六年（713）頃から存在し、養老四年（720）頃の東院地区の大垣の構築と同時期に改造されたことが明らかにされている。その後天平勝宝年間（729-749）にもう一度大きく改造され、苑池それ自体は平安時代初頭まで存続した。苑池の空間変遷はその平面計画や建物配置などの相違から5時期に区分されるが、養老四年頃と天平勝宝年間の2度の改造によって大きく3時期に大別することができる²¹。本稿ではそれぞれ時期の古いものから、最下層苑池、下層苑池、上層苑池とよぶこととする。

以下、東院庭園の各時期の苑池の様相を概観しつつ、その変容によって顕現された空間姿景が庭園スタイルの系譜という座標のなかでいかなる位置にプロットされるのかを考えていきたい。なお、東院庭園の空間デザインの系譜については、特に池の護岸工法に着目した本中の先行研究が存在する²²。本稿でも本中論文を適宜引用しつつ、若干の史的考察を加えていくものとしよう。

東院最下層苑池にみる方池的空間 最下層苑池は発掘調査所見²¹によれば、和銅六年（713）にはその姿景をととのえ、その後養老四年（720）に改造されるまではあったものと考えられている。存在期間はわずか7年ときわめて短い。苑池規模は東西約43m、南北約57mで直線を基調とした汀線計画をなし、排水施設は苑池の東南隅に取設している（第13図）。その

護岸は人頭大の礫を2、3石積み上げた部分と斜面地に貼り付けた部分とがあるが、いずれにしても単純なしつらえとなっている。池の北側には、15m内外の空地地をはさんで南に片庇を付けた桁行9間梁間3間の東西棟建物が存在するのみで、塀などの圍繞施設も苑池周辺には存在せず、現在復原公開されているような装飾的な空間ではなかったことは確かだ。ここで指摘できるのは、苑池の平面計画が護岸の端点部分を円弧状に処理する部分を除いて、きわめて単純な直線形を基本とする逆L字形をなし、ある意味空間デザインとしては方池スタイルに近いという点だ。また、その護岸の土留め手法も飛鳥時代からつづく野面積みとしており、最下層苑池が築造された8世紀第1四半世紀は依然として、苑池の形態が方池から曲池への移行過程にあったとかがわれるのだ。

東院下層苑池にみる日本的意匠の萌芽
 養老四年頃に改造された東院庭園の姿は、当初の逆L字形の平面形を基本としていたものが池の南岸や東岸などに屈曲を加えて本格的な曲池スタイルを具現化している点が注目される（第13図）²¹。その護岸意匠に着目してみると、基本構造は玉石の縁石による単純な土留めを基本としつつも、部分的に護岸には州浜を採用し始めたのが特徴だ。護岸の土留めに州浜を採用するという変化の背景として、古墳の周濠を改修して苑池とするという行為が奈良時代に定着していたということを

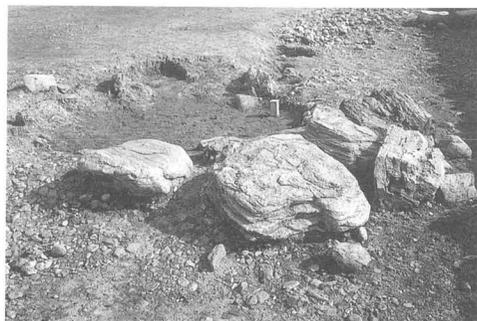


本中は指摘している²⁰。その例には、市庭古墳外濠を改修した平城宮北辺地域庭園遺構や、平塚二号墳前方部斜面と濠を改修した平城京左京一条三坊十五・十六坪庭園遺構などがあるが、本中は古墳葺石の苑池護岸への転用について、「古墳本来の機能が忘れ去られた時に、水と山を象徴とする材料として優れて造園的な取り扱いがなされようとした」²²と考察している。苑池の護岸に州浜が定着してくるのはおおむね8世紀の中期であり、この頃にわが国の曲池スタイルのあり方に州浜という方法が加えられていったのだろう。このような護岸形態は韓国はもとより、中国でも確認されておらず、日本独自の苑池意匠と目されるものだ。つまりわが国では平城京域に多数存在していた古墳の周濠という既存土木的意匠と海景表現を志向した造園的美意識が奇妙な連関をもって結びつき、その延長線上に見出された手法が州浜だったのではないかと考えられ、従来の土木的意匠の造園的解釈による空間ディテールの創造という行為に展開しつつあったと指摘できるのだ。

東院上層苑池と雁鴨池との空間デザインの関係 では、天平勝宝年間の改造では、東院庭園はどのようにその姿景を変容させていくのだろうか。まず平面計画に着目してみると、池は各所に合計7箇所の出島状の突端部を設け、北端のものは中央の直立した立石を中心とした須弥山石組を据えた築山を配して苑池の中心的点景物とし、そのほかのものは突端に腰高程度の立石をあしらって荒磯を表現した岬とする。また、汀線護岸は旧来の玉石敷を全面的に埋め立ててそれよりも小ぶりの礫を敷き詰めた州浜敷とするというダイナミックな変化がみてとれる（第14・15図）。池の南西には緩傾斜の州浜護岸とする中島を浮かべ、池の中央部には平橋を設置してその延長上に饗宴機能を具備した臨池建物を設けている。また、池の北には反橋を設けるのである²¹。このように複雑化する苑池デザインは、同じ区画内での改造であるにもかかわらず、池の面積が下層苑池では約1640㎡であったものが上層苑池では約1780㎡となり、汀線の延長は下層苑池が約264.2mから上層苑池では約333.8mと数値的にも飛躍的に大きな値を示していることからもうかがわれる。このことは苑池が観賞的にも十分配慮されたうえで改造がなされたことを物語るものだが、橋や臨池建物の充実という現象に看取されるように、「歩行」という行為のデザイン、つまり回遊性の確保に



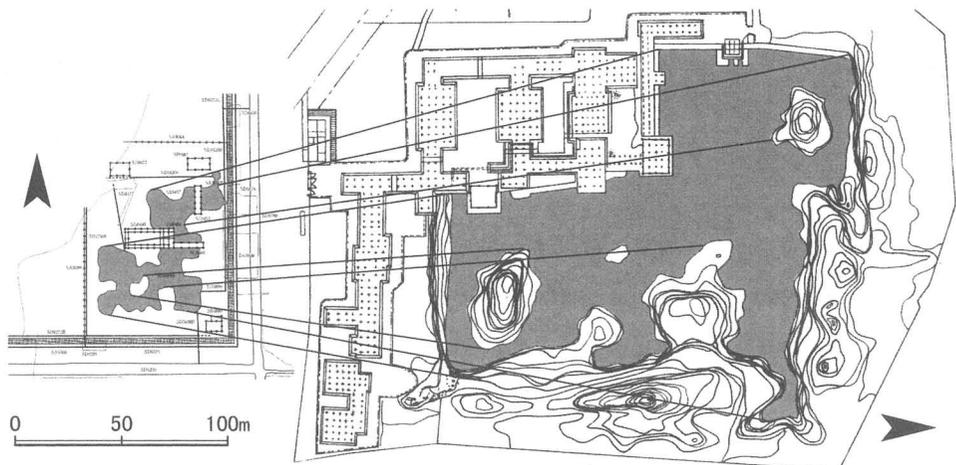
第14図 東院上層苑池北岸の築山と石組



第15図 東院上層苑池東岸の岬

よる接客・宴遊機能の充実を意図して再構成されたものだと指摘すべきだろう。またここで、多くの先行研究²³が共通して指摘してきたことは、慶州の雁鴨池との関連だ。この苑池は池の西岸と南岸が建物の基壇を兼備した直線形態をなすものだが、東岸と北岸は曲線の方形に加工した切石の布積みをめぐらし、その上部には随所に景石を配って自然的な汀線意匠を表出している。本中論文では、雁鴨池と東院上層苑池が方位と規模こそ異にしているもののその平面形がきわめて類似していることから、東院上層苑池は「雁鴨池のミニチュア」だと指摘している²²。東院上層苑池と、雁鴨池の平面計画を回転したものとを比較してみると、確かに酷似していることがわかる（第16図）。岬や入江などの屈曲形状にみる池の平面構成、そして池中に浮かべられた中島の位置関係など、東院と雁鴨池の面積比は1：3.5だが、雁鴨池が東院において箱庭化されたようであり、これを偶然の一致と考える方が難しい。おそらく東院庭園の平面計画は、雁鴨池を模範対象として創作行為をおこなった延長線上に顕現された苑池空間と考えるべきだ――。

ここでもう一度本論文の問題意識に立ち戻りたい。日本庭園が日本的なスタイルとしての独自性を確保することができたのは何によってであっただろうか――すなわちそれは本論文の導入部で述べたように、ダイナミックな自然の風景を庭園の規模に応じて縮小し、象徴的に表現しようとするもの、すなわち「縮景」であった。わが国の庭園は縮景という技法を獲得することによって、独自のスタイルを創造してきたのである。そして東院の上層苑池で立ち現れた空間とは何であろうか――これもまた、雁鴨池の縮小表現ではないか。つまり東院上層苑池は、雁鴨池を確固たる模範対象として、ある意味模倣をきわめた「写し」の苑池だったといっても過言ではない。しかしその行為は原寸大のコピーをつくらうとするのではなく、要所々々を縮小して表現しようとするという、日本庭園が独自のスタ



第16図 東院庭園と雁鴨池との関係

イルを創造していくために選択された手法により構築された苑池でもあったのだ。つまり東院上層苑池は、創作行為において模倣と創造という正反対のベクトルが同時に作用したことによって顕現された特異な空間だと指摘できよう。

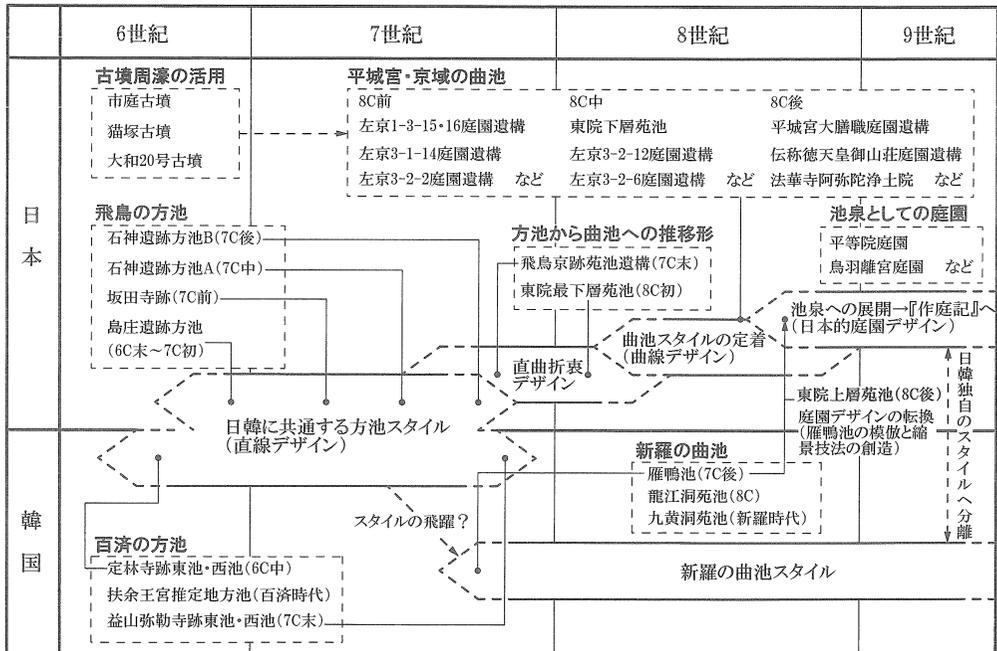
このような視座を獲得したうえで東院上層苑池を眺めれば、この苑池が景石、築山、石組、庭橋など、伝統的な日本庭園の設計言語によって空間記述が可能であることに気づかされるだろう。つまり東院上層苑池の空間はもはや「曲池」というような池の形状をニュートラルに現した単なる物理的存在ではなく、「池泉」という日本庭園としてのスタイルを内包した存在として、奈良時代後半に燦然と輝くのである。

V. むすび

以上本論文では、飛鳥時代から奈良時代に至るまでのわが国の古代苑池を軸にその変容を系統的に記述し、また変容の要因になるものを韓国の古代苑池に求めつつ史的考察をおこなってきた。この考察で導かれた、韓国との関連によるわが国古代苑池の様式史的仮説・推論は、① 飛鳥に数多くつくられた方池は百済の影響により成立し、7世紀を通底する庭園スタイルとなり、② 7世紀後半から8世紀初頭は統一新羅との交流によって曲池スタイルが持ち込まれた可能性が高いものの、その実情は方池と曲池を折衷したスタイルの移行過程にあった。さらに、③ 平城宮・京域で確認された苑池から曲池はおおむね8世紀に入って定着しはじめ、東院上層苑池にみてとれるように、日本的な池泉として苑池スタイルが展開するのは8世紀中頃を時期的動向とする、という大きく3点に集約される。

韓国と日本における方池から曲池に至るまでの展開という点には、大きく半世紀ほどの時期差をともなった様式史的相同性が認められる。また、飛鳥時代に登場した方池、飛鳥時代末期から奈良時代初頭にみられる方池と曲池の折衷形態、そして奈良時代の曲池という苑池スタイルに共通するランドスケープ・デザインの態度は、基本的には韓国の苑池を模倣している点に特徴が指摘できる。しかし逆に、雁鴨池の平面計画を、縮尺を変えてトレースしたような東院上層苑池が模倣の極致に到達したいっぽうで、日本庭園としての独自性を規定する「縮景」という創造的技法を結果的に見出したことがランドスケープ史的には重要視される事象である。以後、日本庭園というスタイルは縮景技法をもとにして平安時代以降本格的な意匠の構築をおこなっていくが、庭園の様式史的結節点に東院上層苑池がプロットされるのは間違いない(第17図)。

さて、わが国の古代苑池の空間デザインを検討していくうえで、韓国との関係だけではなく、やはりその背景にある唐長安城大明宮太液池、洛陽城上陽宮苑池などの苑池を生み出した中国に目を向けなければならないだろう。池中に東海の三山を象徴する中島を設け、空間全体を神仙思想や仏教思想の世界観のなかで構成・意匠を成り立たせようとした



第17図 韓国との関係からみた飛鳥・奈良時代における庭園スタイルの系譜

中国の苑池は、古代東アジア諸国のそれにも通底しており、特に都城における苑池の場合は、宮域における配置計画についても多くの共通項があるからだ。いずれにしてもわが国の古代苑池は東アジア諸国の苑池ときわめて相対的な関係のもとに成り立ったものであり、絶対的な創造行為によって生成されたものではない。このような認識をもとにした今後のわたしたちの研究課題は、中国・韓国・日本の古代苑池に共通する思想・設計言語・空間構成を体系的に整理し、東アジア文化圏に共通する苑池の「インターナショナル・スタイル」とは何かを見定めていくことにあるだろう。インターナショナル・スタイルという参照軸をもって日韓古代苑池を照射すれば、東アジア文化圏という大きな枠組みのなかでのそれぞれの共通性と、各国個別に形成された独自性というふたつの陰影が、より鮮明に可視化されると思うからである。

註

- 1 横井時冬『園藝考』1889年。なお、本書は昭和15年(1940)に改版され、『日本庭園発達史』の名で上梓されている。
- 2 平安時代末期に、関白藤原頼通の三男・橘俊綱(1028~1094)が編纂したとされている。
- 3 重森三玲「上古天津磐座・磐境と神池・神鳥及び庭園」(『日本庭園史大系』第2巻上古・日本庭園源流、1973年)、加藤充彦「日本庭園成立前後の問題」(『文化財論叢』1983年)、本中 真「飛鳥・奈良時代の庭園関連遺構」(『ランドスケープ研究』第61巻第3号、1998年)、田中哲雄「庭園の発生」

(『日本の美術 発掘された庭園』第429号、2002年)などに、詳しく考察されている。

- 4 梶村秀樹『朝鮮史』1977年。
- 5 李御寧『「縮み」志向の日本人』1982年。
- 6 岡崎文彬「概観韓国造園史」(『造園の歴史 II』1982年)、沈奉謹「韓国の苑池」(『第16回檀原考古学研究所公開講演会・第3回日韓古代シンポジウム資料』1999年)、呉承燕『韓国古代宮苑池에 관한 研究』(2002)などに韓国古代庭園の通史が詳しく述べられている。
- 7 定方晟『須弥山と極楽』1973年。
- 8 相原嘉之「飛鳥の古代庭園—苑池空間の構造と性格」『古代庭園の思想—神仙世界への憧憬』2002年。
- 9 高瀬要一「日本の方池と韓国の方池」『奈良文化財研究所紀要 2001』2001年。
- 10 忠南大学校博物館・忠清南道庁『扶餘定林寺址蓮池遺蹟発掘調査報告書』1987。
- 11 秋山日出雄「飛鳥島庄の苑池遺構」『仏教芸術』第109号、1976年。
- 12 外村 中「明日香村島ノ庄方池デザインの起源」(『造園雑誌』第49巻第5号、1986年。
- 13 高瀬要一「飛鳥時代、奈良時代の庭園遺構」(『ランドスケープ研究』第61巻第3号、1998年。
- 14 白志星「韓国・統一新羅時代の古庭園における園池構成の特徴に関する研究」(『日本・中国・韓国の古代庭園シンポジウム資料集』2004年)。
- 15 文化公報部 文化財管理局『雁鴨池発掘調査報告書』1978。
- 16 嶺南文化財研究院『慶州龍江河苑池遺跡』2001。
- 17 兪洪植・呉承燕『慶州九黄洞苑池遺跡発掘調査』2001。
- 18 奈良県立檀原考古学研究所『飛鳥京跡苑池遺構調査概報』2002年。
- 19 石井正敏『東アジア世界と古代の日本』2003年。
- 20 高瀬要一「奈良時代庭園の特色」『日本・中国・韓国の古代庭園シンポジウム資料集』2004年。
- 21 奈良文化財研究所『平城宮発掘調査報告 X V』奈良文化財研究所学報第69冊、2003年。
- 22 本中 真『日本古代の庭園と景観』1994年。
- 23 東院庭園と雁鴨池との関連については、本中 真「平城宮東院庭園の意匠・工法の系譜について」(『日本古代の庭園と景観』1994年)、小野健吉「飛鳥・奈良時代の庭園遺構と東院庭園」(奈良文化財研究所『平城宮発掘調査報告 X V』奈良文化財研究所学報第69冊、2003年)に詳述されている。

図表出典

第2表：註20文献を改変。第1図：註10文献。第2図：『扶余官北里百濟遺蹟発掘調査指導委員会資料』2003。第6・7図：文化公報部 文化財管理局『雁鴨池発掘調査報告書 (図版編)』1978。第8図：註16文献。第9図：『日本・中国・韓国の古代庭園シンポジウム資料集』2004年。第10図：註18文献。第13図：ベース図は註21文献。第16図：ベース図は註21文献、および、東潮・田中俊明『韓国の古代遺跡1新羅篇 (慶州)』中央公論社、1988年。

정원 스타일의 모방과 창조—苑池의 공간 디자인과 고대 韓日

栗野 隆 (아와노 타카시)

요 지 고대 일본의 랜드스케이프 건축가가 백지를 눈앞에 두고 「일본정원」이라고 하는 모습을 그렸다고 생각할 수 없다. 作庭뿐만 아니라 創作이라고 하는 행위는 참조되는 어떤 것과 어느 상대적인 「관계」를 연결하는 것에 의해서 밖에 성립되지 않기 때문이다. 이것은 형태를 흉내내는 모방의 대상이거나 창조를 위한 차이화의 대상이기도 한 것 같은, 창작 행위에서의 「모범/반 모범」이라는 관계로 바꿀 수 있다. 본고에서는 飛鳥·奈良시대 일본 苑池와 한국 苑池의 공간디자인을 비교 검토하고, 「모방」과 「창조」라는 대립 개념을 기본 시점으로 일본 고대 苑池 스타일의 변용을 논했다. 飛鳥시대에 등장한 方池, 飛鳥시대 말기부터 奈良시대 초두에 보이는 方池에서 曲池로의 추이 형태, 그리고 奈良시대의 曲池가 서로 근본을 같이 하는 공간 디자인은, 백제의 方池와 신라 曲池의 모방을 기조로 한 점이다. 韓日에서의 方池에서 曲池에 이르는 전개 과정에는 반세기의 시기 차이를 동반한 양식사적 동질성이 인정할 수 있다. 또한, 東院 상층 苑池는 안압지의 평면 계획을 「축소」하여 따라간 것 같은 점이 있어서 한국 苑池를 모방한 극치로 볼 수 있다. 이것은 한편으로 일본 정원의 독자성을 규정하는 「縮景」이라는 창조적 기법을 결과적으로 이끌어낸 것이기도하며 東院 상층 苑池의 공간디자인이 모방과 창조의 양면성을 포함한 것에 있다고 지적하였다.

키워드 : 고대 苑池, 方池, 曲池, 平城宮 東院 정원, 안압지

Imitation and Creation of Garden Style: Spatial Design of Ancient Gardens in Korea and Japan

Awano Takashi

Abstract : It is not reasonable to assume that the ancient landscape architects in Japan created “Japanese style garden” with a clean slate. Not only gardening but also all creative works must need a certain relationship to some reference examples. This is a complicated relationship of “modeling and anti-modeling” in the process of creation including imitation of model examples and differentiation of the counterparts. In this paper I analyze the spatial designs of garden ponds in Korea and Japan in the Asuka and Nara periods, to discuss the stylistic change of the garden ponds in ancient Japan in terms of two contradicting concepts of “imitation” and “creation”. The style of the garden pond in ancient Japan changed from the square pond in the Asuka period, through the eclectic style of the square and curving ponds in the end of the Asuka period and beginning of the Nara period, to the curving ponds in the Nara period. Each style was originally created by imitating the square pond in Baekje and the curving pond in Silla. The stylistic change of the garden ponds from square to curving occurred in the same way in Korea and Japan; however, Korea preceded Japan for about 50 years. The upper pond at the Tohin in the Heijo palace (東院上層苑池) has been considered to be a typical example of imitation since this is a miniature version of the Anab pond (雁鴨池) in the plan; however, this also created the technique of “miniaturization” that is an element of originality in Japanese garden. We conclude that the creation of the upper pond at the Tohin implies the ambiguous significance of imitation and creation.

Keywords : ancient garden, the square pond, the curved pond, the Tohin garden in the Heijo palace (平城宮東院庭園), the Anab pond (雁鴨池)